



14 ◇ 古文 1

◇ 古文の特徴

① 歴史的かなづかい

古文では、現代とは異なるかなづかい（歴史的かなづかい）が用いられている。

- 原則として語頭ではない場合の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、「わ・い・う・え・お」に読みかえる。
- 「ゐ」は「い」、「ゑ」は「え」に読みかえる。
- 「ぢ」は「じ」、「づ」は「ず」に読みかえる。
- 助詞以外の「を」は「お」に読みかえる。
- 母音によって発音が変わる次のような読み方に注意する。

「a + u（あう）」 → 「o（おう）」
 「i + u（いう）」 → 「yū（ゆう）」
 「e + u（えう）」 → 「yō（よう）」

〈例文研究1〉

春はあけぼの。やうやう白くなりゆく、山ぎはすこしあかりて、むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる。

夏は夜。月のころはさらなり、やみもなほ、ほたるの多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。

（『枕草子』）

——線㊦「やうやう」の母音は「y + u y + u」で、発音は「yō yō（ようよう）」となる。㊦の「は」は「わ」に、㊦の「ほ」は「お」に、㊦の「ひ」は「い」に、㊦の「を」は「お」にそれぞれ読みかえる。

- ② 現代語とは異なる言葉（古語）が用いられている。
- ③ 言葉の省略がある。

古文は省略の多い文章である。省略されることが多いのは、主語・述語・助詞などである。読む際は、「だれが」「何を」「どうした」かを考え、省略された言葉を補いながら訳す。

〈例文研究2〉

今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて、竹を取りつつ、よろづの事に使ひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。

（『竹取物語』）

「今は昔」のあとには、「のことであるが」といった言葉が省略されている。また、「竹取の翁といふ者」の次には主語を示す格助詞の「が」が省略されている。

〈現代語訳〉

今となってはもう昔（のことであるが）、竹取の翁という者がいた。野山に分け入って、竹を取っては、いろいろなことに使っていた。（その翁の）名前を、さぬきのみやつことといった。

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

年ごろあそび馴れつるところを、あらはにこぼち散らして、たちさわぎで、日の入りぎはの、いとすぐきりわたりたるに、車に乗ると、うち見やりたれば、人まにはまゐりつつ、額をつきし薬師仏のたち給へるを、見捨てたてまつる悲しくて、人しれずうち泣かれぬ。

(『更級日記』)

〈現代語訳〉

長年このかた遊びなれていた所を、外からまる見えになるほど仕切りをこわしたりして、騒ぎたて、日のしずみぎわの、たいそうもの寂しく(冷気が迫るように)霧が一带に立っているころ、牛車に乗るというので、目をやって見ていると、人目のない時にお参りし続け、額を(床に)すりつけて拝んだ薬師仏がお立ちになっているので、お見え捨て申しあげるのが悲しく、人知れずつい涙が出てしまった。

問一 — 線①・②をそれぞれ現代かなづかいに直し、すべてひらがなで書け。

①

②

問二 — 線③「人しれずうち泣かれぬ」とあるが、その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 薬師仏をお見捨て申しあげるのが悲しかったから。

イ 冷気が迫ってきたので恐ろしくなったから。

ウ 家の中が乱雑なので見苦しかったから。

エ 人目のない時にお参りするのがいやだったから。

問三 この文章は何について描かれているか。最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 門出 イ 集会 ウ 口論 エ 乗船

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

夜もいまだ明けやらぬに中間なる者戸をあけ、さてもおびただしく雪の降りたるはと言ふ。亭主聞きつけいかほど降りたるぞと問へば、されば深さは五寸ほどつもりて候ふ。幅は知れぬと申したり。

(『江戸笑話集』)

〈現代語訳〉

夜もまだ明けてしまわないうちに中間(＝召し使い)の者が戸を開け、何とまあものすごく雪が降ったものだと言う。亭主が聞きつけてどれほど降ったのだと尋ねると、そうですね深さは五寸ほど積もってございます。幅はわかりませんと申したのだった。

問一 — 線部を現代かなづかいに直し、すべてひらがなで書け。

問二 「中間なる者」と「亭主」の発言を、古文中からそれぞれ書き抜け。

中間なる者

亭主

問三 この文章のおもしろさはどんなところにあるのか。最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 中間なる者が雪の積もった深さをきちんと答えたところ。

イ 中間なる者が積もった雪の幅はわからないと答えたところ。

ウ 夜が明けないのに中間なる者が戸を開けたところ。

エ 亭主が中間なる者にまじめに問いかけたところ。

3

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

盗人ぬすびと寄り来たりて、車のすだれを引き開けて見るに、裸はだかにて史さめたれば、盗人あさましと思ひて、

「こは、いかに。」と問へば、史、

「東の大宮にてかくのごとくなりつる。①公達きんだち寄り来たりて、己が装束きざくをばみな召しつ。②」

と、笏しやくを取りて、よき人に物申すやうにかしこまりて答へければ、盗人笑ひて、棄すてて去りにけり。

正装する時右手に持つ細長い板
〔現代語訳〕
盗人（「寄ってきて、車のすだれを引き開けて見ると、裸で史が座っているの、盗人は驚きあきれたと思って、

「これは、どうしたことだ。」と尋ねると、史は、

「東の大宮大路でこんなことになってしまいました。公達（「寄つてきて、私の装束をみんなお取り上げになったのです。」

と、笏を持って、身分の高い人にでも申し上げるようにかしこまって答えたので、盗人は笑って、（史を）放置して行ってしまった。

問一 — 線①「かくのごとくなりつる」とあるが、「かくのごとく」の指している内容を書け。

問二 二つの（ ）に共通してあてはまる一字の助詞を書け。

問三 — 線②「よき人に物申すやうに」とあるが、だれがだれに對してそう接したのか。

4

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

いづれの書ふみを読むとても、初心のほどは、かたはしより文義ぶんぎを解せんとはすべからず。まづたいいにさらさらと見て、他の書にうつり、これやかれやと読みては、またさきに読みたる書へ立ちかへりつつ、幾遍いくへんも読むうちには、始めに聞こえざりしことも、そろそろと聞こゆるやうになりゆくものなり。

〔現代語訳〕
どの本を読むとしても、初めてのころは、はじめから文章の意味を理解しようとはしてはならない。まず、だいたい、さらっと読んで、ほかの本を読んでみたり、あれこれと読んでは、また最初に読んだ本にもどったりして、何度も読むうちには、最初に意味のわからなかったことも、だんだんとわかってくるようになるものである。

問一 — 線①「聞こゆるやうになりゆくものなり」とは、どういう意味か。現代語訳中から書き抜け。

問二 — 線②「してはならない」にあたる古語を、古文中から書き抜け。

問三 筆者は、初学者が本を読む場合はどういう読み方をするのがよいと言っているか。それが具体的に示されている部分を古文中から六十字前後で探し、その初めと終わりの四字を書き抜け。

問一 — 線①「聞こゆるやうになりゆくものなり」とは、どういう意味か。現代語訳中から書き抜け。

問二 — 線②「してはならない」にあたる古語を、古文中から書き抜け。

問三 筆者は、初学者が本を読む場合はどうい読み方をするのがよいと言っているか。それが具体的に示されている部分を古文中から六十字前後で探し、その初めと終わりの四字を書き抜け。

--	--	--	--	--	--

5 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

花は盛りに、月はくまなきをのみ見るものかは。雨にむかひて月を恋ひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれに情け深し。咲きぬべきほどのこずゑ、散りしをれたる庭などこそ見どころ多けれ。

(『徒然草』)

〈現代語訳〉

桜の花はまっ盛りに咲いているのだけを、月はかげりもなく照り渡っているのだけを見るものだろうか。雨に向かって(見えない)月を恋しいと思い、すだれをたれて家の中に閉じこもっていて春がうつりゆくのを知らずにいるのも、やはりしみじみとして情趣が深い。今にも咲きそうなころのこずゑや、(花が)散りしおれている庭などこそ見どころが多い。

問一 — 線①「なほあはれに」を現代かなづかいに直して書け。

問二 — 線②「見るものだろうか」とあるが、このあとに補う言葉

の内容として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア そうに決まっている。 イ そうであってほしい。

ウ いや、そうではない。 エ そうではないらしい。

問三 筆者の考えと合うものを次から一つ選び、記号で答えよ。

ア 月や花は最盛期だけに価値があるのではない。

イ 月や花は最盛期以外価値がない。

ウ くもっている月より散ってしまった花に価値がある。

エ 月や花にはあまり見どころはない。

6 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

やまと歌は、人の心よりあめつち・鬼神をも感ぜしむるなどいふは、和歌の道に限る事にはあらず。ただ一つの誠もてこそ、大ぞらをも動かすべけれ。されば、よしことばの花を咲かせたりとも、誠のつらぬくにあらざれば、えうなきことなり。

(『花月草紙』)

〈現代語訳〉

和歌は、人間の心によって天地・鬼神をも感動させるなどというのは、和歌の道に限ったことではない。(どの道であろうとも)ただ一つの誠によつてこそ、大空をも動かすことができるはずである。だから、たとえ、誠が一貫しているのであれば、無益のことである。

問一 — 線①「大ぞら」は何をたとえたものか。最も適当なものを

次から選び、記号で答えよ。

ア 動くもの。 イ 青いもの。

ウ 動かないもの。 エ 美しいもの。

問二 — 線②「えうなきこと」を現代かなづかいに直して書け。

問三 現代語訳中の□にあてはまる言葉として最も適当なものを

次から選び、記号で答えよ。

ア ことばの響きに感動したとしても

イ 花の美しさをことばで表現したくても

ウ ことばを美しくかざったとしても

エ たくさんのことばを使ったとしても

1 次の各文はいくつの文節に分けられるか。それぞれ漢数字で答えよ。

- (1) 私が引越した月は雨の降らない日が続いた。
 (2) 布団に入って目をつぶったが眠れなかった。
 (3) さあ、みんなで一緒に歌おう。
 (4) 洪作は再び座り込んだ。

(1) _____
 (2) _____
 (3) _____
 (4) _____

2 次の各文はいくつの単語に分けられるか。それぞれ漢数字で答えよ。

- (1) 大きな川が静かに流れる。
 (2) この辺りはずいぶん静かだ。
 (3) ぼくは遅刻したので、先生にしかられた。
 (4) まだ学校へ行かないの。

(1) _____
 (2) _____
 (3) _____
 (4) _____

3 次の各文は、あとの基本文型のうちのどれにあたるか。それぞれ記号で答えよ。

- (1) 風が吹く。
 (2) 夕日が美しい。
 (3) 造花だよ、この花は。
 (4) 車が何台も通り過ぎた。
 (5) 何かがどうする
 (6) 何かが→どんなだ
 (7) 何かが→何だ

(1) _____
 (2) _____
 (3) _____
 (4) _____
 (5) _____
 (6) _____
 (7) _____

4 次の各文の主語と述語をそれぞれ一文節で書き抜け。

- (1) 生徒たちの笑い声が朝の校庭に広がった。

主語 _____
 述語 _____

- (2) 花を飾ったのは私の姉です。

主語 _____
 述語 _____

- (3) 来年の初夏も今年のようにさわやかでしょう。

主語 _____
 述語 _____

5 次の——線部が直接修飾している文節をそれぞれ書き抜け。

- (1) いくつか小さい水たまりができていたが、特に問題はないようだ。

① _____
 ② _____

- (2) 自転車の荷台に積んだかごが、今朝何者かによって盗まれた。

① _____
 ② _____

6 次の各文中から独立語をそれぞれ書き抜け。また、その独立語の種類をあとから選び、それぞれ記号で答えよ。

- (1) おや、この川には魚がいるね。

(2) 富士山、それは日本を代表する山です。

ア 感動 イ 呼びかけ ウ 応答 エ 提示

7 次の各文中の□にあてはまる接続語として最も適当なものをあとのア～カから選び、それぞれ記号で答えよ。また、その接続語の種類をあとのA～Fから選び、それぞれ記号で答えよ。

- (1) 雨が降った。□道はそれほど悪くなっていない。
(2) 洋食にしますか。□和食にしますか。
(3) 風が強く吹いている。□花火大会は中止だろう。
(4) 仕事は終わった。□次は何をしようか。
(5) 海へ行った。□山にも行った。
(6) 彼はりっぱだ。□責任感が強いからだ。

ア なぜなら イ そして ウ けれども エ それとも
オ だから カ さて

A 順接 B 逆接 C 並列 D 説明 E 選択 F 転換

(4)	(1)
□	□
(5)	(2)
□	□
(6)	(3)
□	□

8 次の各文の組み立て（構造）上の種類をあとから選び、それぞれ記号で答えよ。

- (1) 花の咲く春が近づいた。
(2) なつかしい少年時代が思い出される。
(3) おじいさんは山へ行き、おばあさんは川へ行きました。

ア 単文 イ 重文

ウ 複文

(1)
□
(2)
□
(3)
□

9 次の各文は、内容の上からあとのどの種類の文にあたるか。それぞれ

れ記号で答えよ。

- (1) そんなことがあるのでしょうか。
(2) すぐに運動場に集まれ。
(3) なんとよい天気なんでしょう。
(4) おおぜいの見物人がやって来た。

ア 平叙文 イ 疑問文 ウ 命令文 エ 感動文

10 次の各文の——線部は、あとの文の成分のうちのどれにあたるか。

それぞれ記号で答えよ。

- (1) くもっているが、それほど寒くはない。
(2) 日は西の山に沈んだ。
(3) 彼らはよく訓練された登山家だ。
(4) 会場のみなさん、盛り上がっていますか。
(5) 美しい色をした小鳥が鳴いている。

ア 主部 イ 述部 ウ 修飾部 エ 接続部

(1)
□
(2)
□
(3)
□
(4)
□
(5)
□

11 次の各文の文節と文節の関係をあとから選び、それぞれ記号で答えよ。

- (1) 晴れたから 遊ぼう。
(2) 夕立が 降る。

ア 主・述の関係 イ 修飾・被修飾の関係

ウ 補助の関係 エ 並立の関係

オ 接続の関係

(1)
□
(2)
□

12 次の各文の単語を自立語と付属語に分け、それぞれ順に書き抜け。

(1) もう、春の気配が感じられる。

自立語

付属語

(2) あの白い建物は私たちの学校です。

自立語

付属語

13 次の文中の——線①～⑥の単語の品詞名をあとから選び、それぞれ記号で答えよ。

① 文化祭の出し物を何にするかについてみんなで話し合ったが、おも
② しろい案はなかなか出てこなかった。
③
④
⑤
⑥

ア 動詞

イ 形容詞

ウ 形容動詞

エ 名詞

オ 副詞

カ 連体詞

キ 接続詞

ク 感動詞

ケ 助動詞

コ 助詞

①

②

③

④

⑤

⑥

14 次の文中から名詞をすべて書き抜け。

西の空が晴れたので、赤い夕日がとてもきれいに見えました。

15 次の語の中から動詞をすべて選び、記号で答えよ。

ア 聞こえる イ 夕焼け ウ 書く エ 悲しい
オ たいした カ きれいだ キ しかも ク 見る

ケ 近く

コ いる

16 次の各組の語の中から品詞や性質が異なるものを一つずつ選び、それぞれ記号で答えよ。

(1) ア 一つ イ 論語 ウ 太平洋 エ おかしな
(2) ア する イ いわゆる ウ 走る エ 出る
(3) ア 静かだ イ 健康だ ウ 本だ エ 陽気だ
(4) ア すると イ しかし ウ さて エ まあ
(5) ア よもや イ かりに ウ こちら エ なぜ

(1)

(2)

(3)

(4)

(5)

17 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

広くて美しい近所の公園にお花見に行った。私の娘は、この春から幼稚園なのだ。そこで、家族みなでお祝いをかねて出かけた。桜の小さな花びらがゆつくりひらひら舞い降りてきた。私は、ゆかいな気分になり、芝生に寝転んだ。青い空がとてもきれいだった。

問一 文中から、形容詞、副詞、連体詞、接続詞をすべて書き抜け。

形容詞

副詞

連体詞

接続詞

問二 ——線部から、形容動詞をすべて書き抜け。